

二〇二二年七月九日

小流れの堰を塞がるあめんぼう
糸やなぎ風に縋りてはまたほどけ
松原を海へと駆くる跣足かな
ラムネ抜くぼんと昭和の音すなり
どくだみの香を束ねつつ鎌を引く
目鼻なきお地藏さまや木下闇
扇風機まわり続けて忘れられ

二〇二二年七月八日

梅雨滂沱街一瞬にモノトーン
夏暁の鳥語に耳を澄ます犬
雨粒のつきしままなる茄子をもぐ
母の忌の早寝の父や星まつり
海亀の帰る背中に浜灯り
万緑を背に妍きそふ朱の裳階
風鈴のお喋りやまぬ路地の風

二〇二二年七月七日

箱舟に摘まむ三つ指蓴菜女
風鈴の鳴りてややあり風届く
掬ひたる指の形に夜光虫
狩衣の絹の光沢夏祓

二〇二二年七月六日

直立し大雨に耐ふ立葵
浴衣着て乙女となりし六年生
旅の吾に梯梧咲き満つ島日和
端居して免許返納決めし父
夕市へ紅の鼻緒の素足かな

やよい 菜々 素秀 宏虎 あひる こそす たち子 むべ こそす なたき 素秀 明日香 たち子 智恵子 たち子 素秀 うつき ぼんこ やよい もとこ なつき うつき

二〇二二年七月五日

水鉄砲メタボの臍を狙ひうち
締込みの子の四股高く宮涼し
麻服の皺の馴染める齢かな

二〇二二年七月四日

かわらけの夕焼越えゆく屋島かな
青簾連なり揃ふ京町家
太陽の塔抱擁す雲の峰
籐椅子の飴色光る曲がり縁
板廊の足裏に絡む梅雨湿り
沐浴や新米パパの汗光る

二〇二二年七月三日

もてなしの白湯を甘露と夏遍路
忌を修す仏間に父のパナマ帽
凌霄花歩道を染めるほどに敷く
味噌蔵のいにしえ伝ふ麻のれん
峰雲の天辺みてるキリンの目
ハンモック薄き一冊読了す
千年宮雌雄の岩の滝涼し
紙垂涼し一木一草神宿る
釣糸に引つかかりたる海月かな
礼拝堂涼し一番乗りの朝

なつき 素秀 もとこ 素秀 智恵子 もとこ 智恵子 せいじ やよい 素秀 もとこ 素秀 智恵子 せいじ せいじ せいじ

毎日句会みぬる選・二〇二二年七月二日